

序

平成23年度は、「今後の日本に必要な社会資本整備とは」をテーマとして、昨年7月から「学生論文部門」の募集を開始(締め切り9月30日)し、大学院、大学、高専あわせて28編の応募をいただきました。今回は残念ながら、最優秀賞に該当する論文がなく、優秀賞1編と佳作2編を選定しましたので、概要を紹介します。

1. 審査結果

- ・ 応募結果:28編
 - ※分野別:理工系21編、文系7編
 - ※学校別:大学院7編、大学8編、高専1編
- ・ 審査結果
 - 最優秀賞:該当者なし
 - 優 秀 賞:1編
 - 佳 作:2編

■優秀賞

- ・ 島田 智樹(慶應義塾大学)「安心・安全でスマートなエネルギー～小水力発電普及への提言とその課題～」

■佳 作

- ・ 保志名 沙紀(青山学院大学)「医療施設を中心としたネットワーク型コンパクトシティ形成に向けた社会資本整備の提案」
- ・ 吉村 朋矩(福井工業大学大学院)「次世代都市へ向けた挑戦—未来の子どもたちへ—」

2. 審査方法と受賞論文

昨年度のテーマは「低炭素社会にふさわしいまちづくり」でしたが、2011年3月の東日本大震災の大災害を始め、災害が多発し、まさに日本における防災・減災のあり方が問われていることから、今年度のテーマは「今後の日本に必要な社会資本整備とは」としました。

論文の審査は、当協会の広報委員会委員(11名)が行いました。審査基準をもとに最初に各委員がそれぞれ全ての論文を評価し、全員の評価結果を集計・整理し、広報委員会での最終審査会を経て、表彰論文を決定しました。

応募校の内訳は、大学院7校※、大学8校※、高専1校※でした。地域別で見ると、関東(東京、埼玉、神奈川)、新潟、愛知、岐阜、福井、京都、奈良、福岡から応募を頂きました。北海道・東北・中国・四国地方からの応募は今回ありませんでした。(※重複除く)

学科別で見ると理工系からの応募が19名で最も多く、文系から7名、医学部からも2名の応募を頂きました。

応募の動機については、大学内等に掲示されたポスターによるものが11名、研究室の教官や就職先企業関

係者の紹介によるものが8名、協会ホームページやコンテスト情報サイト“登竜門”等のインターネットによるものが9名で、ポスターによるものが多いですが、ほぼ同数といえます。

表彰論文として選ばれた優秀賞1編、佳作2編の講評は次のとおりです。

■優秀賞受賞論文

○島田 智樹(慶應義塾大学)

「安心・安全でスマートなエネルギー～小水力発電普及への提言とその課題～」

小水力発電について、「いまだ使われていないものの力を引き出す、社会資本整備」という切り口から、末端へのマイクロ水力発電にいたるまで、手続きの簡素化や、ファンドの設立まで踏み込んでおり、エネルギー源としてのみならず、観光資源としての活用といった別な角度からも論じられているのが評価されました。主張がしっかりと構成された論拠で展開されています。電力エネルギーの需給の中での小水力発電の位置づけと重要性、災害時の対応について展開すると、さらに説得性を深めることができたでしょう。全体を通じて、新たなエネルギーについてオリジナリティのあるアイデアでの提案を優れた論理展開で記述されたことに概ね審査員の評価は高く、優秀賞に値するものでした。

■佳作受賞論文

○保志名 沙紀(青山学院大学)

「医療施設を中心としたネットワーク型コンパクトシティ形成に向けた社会資本整備の提案」

医療施設を中心市街地活性化の目玉と捉え、コンパクトシティの形で実現化するスキームまで提案したアイデアは独創的でした。生命の維持に係るインフラ(医療)を制約条件として都市構造を提案したことは、土木分野と異質なアプローチで新鮮で興味深いものでした。また具体的データに基づき図表もわかりやすく、論理的に構成されており評価に値するものです。なおコンパクトシティへの人の移動という課題を認識し、医療施設を中心としたコンパクトシティ形成に向けた論旨を展開していくことでさらに論拠を深めることができたでしょう。課題はあるものの佳作受賞に値するものでした。

○吉村 朋矩(福井工業大学大学院)

「次世代都市へ向けた挑戦—未来の子どもたちへ—」

バイコロジー都市の提案は独自性がありアイデアとして興味深いものです。自転車利用のバイコロジーから環境運動まで発展したという歴史とその観点から効用についての論拠が読者の興味を引く展開になっていました。写真、図表の使い方も分かりやすく、評価に値するものでした。論文の構成としては2章～3章で述べられた巨大地

震のメカニズムと復興計画と、バイコロジーとの関係が不明瞭であり、論拠を明確にして関連づけることが望まれます。さらにバイコロジー都市への提唱「自動車依存から自転車活用社会へ」という主張の根拠をしっかりと論理展開されることが望まれます。いくつかの課題はあるものの佳作受賞に値するものでした。

(広報委員会)

